

日本語教育支援システム研究会  
第10回国際研究集会

CASTEL/J

2023



castelj2023@gmail.com



<https://castelj.cf/>



<https://www.facebook.com/castelj2023/>



2023年8月10日、11日

ベトナム、ホーチミン市師範大学



# 同期型オンラインで行われた 学習者の母語を活用した日本語発音授業に関する実践報告

劉羅麟（早稲田大学）

## A Practical Report of Using Learners' L1 in Learning L2 Japanese Pronunciation in a Synchronous Online Class

Luolin LIU, Waseda University

要旨：音声教育における母語の活用を探究するために教育実践を行ったが、コロナにより同期型オンライン授業の形を取った。本実践は、①スマホとメールを用いた発音課題、②オンラインアンケートを用いた聴取課題、③Zoomを用いた同期型授業、④オンラインアンケートを用いた振り返り、⑤SNS（WeChat）を用いた課題へのフィードバック、という五つから構成される。本発表では、1) 対面で学習者の発音練習をサポートできない、2) 面識のない学習者の授業への持続参加を促しづらい、という二つの難点を解決するために施した工夫について報告する。本発表の最後では、学習者による振り返りシートの記述を踏まえ、今後の課題を示し、来場者と意見交換を行う。

キーワード：音声教育、ICT技術、スマートフォン、Zoom、SNS

### 1. はじめに

音声教育における母語の活用（劉 2022, 2023）を探究するために、筆者は教育実践を行った。当初は対面形式を想定したが、新型コロナウイルス感染症の影響によりオンラインに変更し、次の二つの難点に直面した。第一に、対面で学習者の発音練習をサポートできないという難点である。オンラインでは複数名がマイクをオンにすると音声は不明瞭になるため、対面で行ったような発音の全体練習が難しい。また、練習の様子を画面越しで把握しづらいため、適切なアドバイスを与えるのも困難である。第二に、面識のない学習者の授業への持続参加を促しづらいという難点である。オンラインでは受講環境を自由に選べる反面、教師やクラスメートとの接触に限られる。多くの場合、一人で画面に向かって知識を学習したり発音を練習したりするため、クラスとしての一体感が対面と比べ生まれにくい。その結果、孤立していると感じ、受講を中止する学習者も少なからずいる。

オンラインの発音授業における難点を解決するための教育上の工夫に関して、非同期型授業については戸田・大久保（2014）や戸田ほか（2018）などが挙げられるが、同期型授業については管見の及ぶ限り見当たらない。本発表では、上記で述べた二つの難点を解決するために、筆者が施した工夫について報告する。

### 2. 教育実践の概要

本実践では、学習者が持つ母語と母方言の音声に関するメタ言語知識を活かし、目標言語である日本語の音声について学習することを目的とする。2022年9月～11月の間、計10週間行った。実践は図1のように、①スマートフォン（以下、スマホ）とメールを用いた発音課題、②オンラインアンケートを用いた聴取課題、③オンライン会議ツールZoomを用いた同期型授業、④オンラインアンケートを用いた振り返り、⑤SNSを用いた課題へのフィードバック（以下、FB）、の五つから構成される。そのうち、①と②は授業前と授業後の2回ある（内容が同じで提示順が異なる）。⑤は全体と個別の2種類ある。



図1：実践の構成（各週の流れ）

本実践の参加者は、筆者の知人である日本語教師による協力の下で、WeChat という SNS アプリを通して募集した、中国語母語話者の日本語学習者である（母方言は様々）。日本語学習歴は6～12ヶ月であり、日本語の音声をテーマとする授業を受講した経験はない。オリエンテーションには32名が参加したが、10週目（最終回）の時点では27名となった。普段の学業または仕事と時間が被るなどの理由で受講を断念した学習者5名を除けば、ほかの27名は全員最後まで参加し、出席率も95.56%と高かった。

### 3. 本実践における教育上の工夫

#### 3.1 学習者の発音練習をサポートするための工夫

対面で学習者の発音練習をサポートできないという難点を解決するために、以下の四つの工夫を施した。

一つ目は、図1の①で、学習者が指定の語や文を読んでスマホで録音し、それをメールで教師に提出するという形を取ったことである。従来の対面の発音指導では、教室にいる学習者が発音し、教師がそれを聞いたうえで指導することが多い。しかし、直前の発音に対する短期記憶に頼りながら瞬時に判断し、適切なFBを行うことが容易ではない。スマホの録音を用いることで、教師は学習者の発音をより緻密に分析でき、FBもしやすくなった。学習者も自宅などの環境で、落ち着いた状態で発音できるようになった。

二つ目は、図1の③で、チャットと投票機能を用いて母語と日本語の音声について討論



する時間を設けたことである。言語習得において意識化の重要性が広く指摘されており、戸田（2019）のブレンディッド・ラーニングの実践でも言語間の音韻対照を通して音声に対する意識化を促している。本実践では音韻対照の結果を直接示すのではなく、学習者が主体的に考え、チャットと投票で自由に議論する。例えば、中国語の t/d と日本語の t/d の発音は同じか、自身や友人の名前の声調／アクセントに規則はあるか、などである。このように母語と日本語の音韻上の異同に関する意識化を促し、発音学習の基礎を築いた。

三つ目は、図 1 の③で、ブレイクアウトルーム機能を用いてグループ練習の時間を設けたことである。同じ中国語話者とはいえ、母方言や学習経験などにより問題となる音声項目が必ずしも同じではない。グループ練習の際には、ある音声項目が得意な学習者がそうでない学習者に自身の発音方法や練習方法を説明する、などのような協働学習が生まれた。教室でも協働学習は無論可能だが、他グループの声が響き渡り、発音練習がうまくできないことが多い。他グループに影響されないのはブレイクアウトルームの利点であろう。

四つ目は、図 1 の⑤で、課題に対する FB を WeChat で行うという形を取ったことである。発音に対する FB は文法や語彙と異なり、文字だけでは伝えづらいことが多い。WeChat を用いることで、文字での解説に加え重要な箇所を音声で説明することも可能となった。また、スタンプや emoji を併用し、FB を学習者にとって受け入れやすい形に工夫した。これは戸田・大戸・竹内（2019）で報告されている、オンラインで行われる文字ベースの FB をさらに発展させた工夫だと言える。なお、FB が会話履歴に残るため、学習者は自身の発音上の進歩と問題点を容易に確認でき、学習の自己管理と調整にも繋がる。

### 3.2 学習者の授業への持続参加を促すための工夫

面識のない学習者の授業への持続参加を促しづらいという難点を解決するために、以下の二つの工夫を施した。

一つは、図 1 の③で、カメラオンでの受講を推奨したことである。オンライン授業の場合、通信速度に対する懸念や個人的な理由などにより、カメラをオフにした状態で受講する学習者が多い。カメラオフだと学習者の反応を、特に発音授業の場合、学習者の口元の様子を把握できない。そのため、オリエンテーションではこの理由を学習者に説明し、練習の際は必須で、それ以外は特別な理由（例：接続が不安定）がない限りカメラオンを推奨した。その結果、説明や練習を行う際に意思疎通が円滑になった。それだけでなく、発音に関わるエピソードについて語る際にも、そのエピソードに学習者が笑う姿や驚く姿が画面に映り、クラス全体の雰囲気は向上した。

もう一つは、図 1 の⑤で、WeChat に学習グループを作成したことである。1 節でも言及したように、オンライン授業において学習者が孤立しているように感じ、徐々に授業に参加しなくなるケースが多々ある。学習グループを活用し、クラスの一体感の向上を図った。教師は授業に関する連絡や、発音課題における共通の問題点に関する全体 FB を行っていた。学習者も自発的に、発音ないし日本語全般の学習に関する情報を共有したり、大

学生生活や日本での生活について雑談したりしていた。このように学習グループは教師と学習者、学習者同士のラポール形成を促し、授業への持続参加にも繋がったと考えられる。

#### 4. 学習者の意見と今後の課題

10 週目の振り返りアンケート（図 1 の④）の分析を通して、本実践で行ったオンライン授業について、学習者からは主に以下の 3 種類の意見があるとわかった。

- 1) SNS を用いた FB の分かりやすさ：学習者は課題に関する詳細な FB を WeChat で受けられること、さらに FB について即時に質問できることで、自身の発音上の問題点を明確に把握できると感じた。また、継続していくうちに発音の改善を実感できた。
- 2) 居住地の異なる友人ができた喜び：学習者はオンラインだからこそ地理的な距離を無視し、日本語という共通点を持つ友人ができたことを、授業で得た大きな収穫の一つだと捉えた。単なる言語の学習に囚われない日本語教育の意義が見出された。
- 3) オンラインにおける講義動画の配信に関する希望：学習者は授業を通して音声の重要性に関する気づきを得たと同時に、普段の授業で発音を学習する機会の欠如を痛感した。初期からの発音学習が重要だという理由から、Bilibili や TikTok などのプラットフォームを通して講義動画を配信することを希望した。

本実践で施したオンライン授業の工夫は学習者から高い評価を受けたが、教師の負担を減らし実用性を高める必要がある。例えば、事前に用意した文字と音声を併用した FB を、学習者が提出した発音課題の問題点に応じて送信できるアプリを開発することである。

#### 謝辞

本発表は早稲田大学研究助成費（2022E-035）による研究成果の一部である。

#### 参考文献

- 戸田貴子. 2019. 「ブレンディッド・ラーニング—新たなモデルの構築と音声教育実践—」, 『早稲田日本語教育学』 26: 107-126.
- 戸田貴子, 大久保雅子. 2014. 「新しい音声教育実践における学習者の学び—オンデマンド併用授業による発音学習—」, 『早稲田日本語教育学』 14-15-16: 1-18.
- 戸田貴子, 大久保雅子, 千仙永, 趙氷清. 2018. 「グローバル MOOCs の相互評価における継続参加—日本語発音オンライン講座の分析を通して—」, 『日本語教育』 170: 32-46.
- 戸田貴子, 大戸雄太郎, 竹内雪乃. 2019. 「発音チェックにおけるフィードバックの工夫—オンラインでのラポール形成を目指して—」, 『早稲田日本語教育学』 26: 179-188.
- 劉羅麟. 2022. 「日本語の音声の授業における学習者の母語の活用—学習者が得た知識面・

認識面・運用面の学び―」, 『日本語／日本語教育研究』 13: 169-184.

劉羅麟. 2023. 『日本語の音声の習得と教育における母語の役割―学習者の母語と母方言を活用した音声教育を目指して―』 早稲田大学大学院日本語教育研究科博士学位論文.